

日本民俗文化大系 3

稲と鉄

|| さまざまな王権の基盤 ||

日本民俗文化大系 3

稲と鉄

|| さまざまな王権の基盤 ||

小学館

日本民俗文化大系 第三卷

稲と鉄Ⅱさまざまな王権の基盤Ⅱ

昭和五十八年二月十五日 初版第一刷発行

定価四、五〇〇円

著者代表——森 浩 一

発行者——相 賀 徹 夫

発行所——株式会社 小学館

東京都千代田区一ツ橋二ノ三ノ一 郵便番号一〇一

電話 編集〇三—二三〇—五七〇〇

製作〇三—二三〇—五三三三

販売〇三—二三〇—五七六三

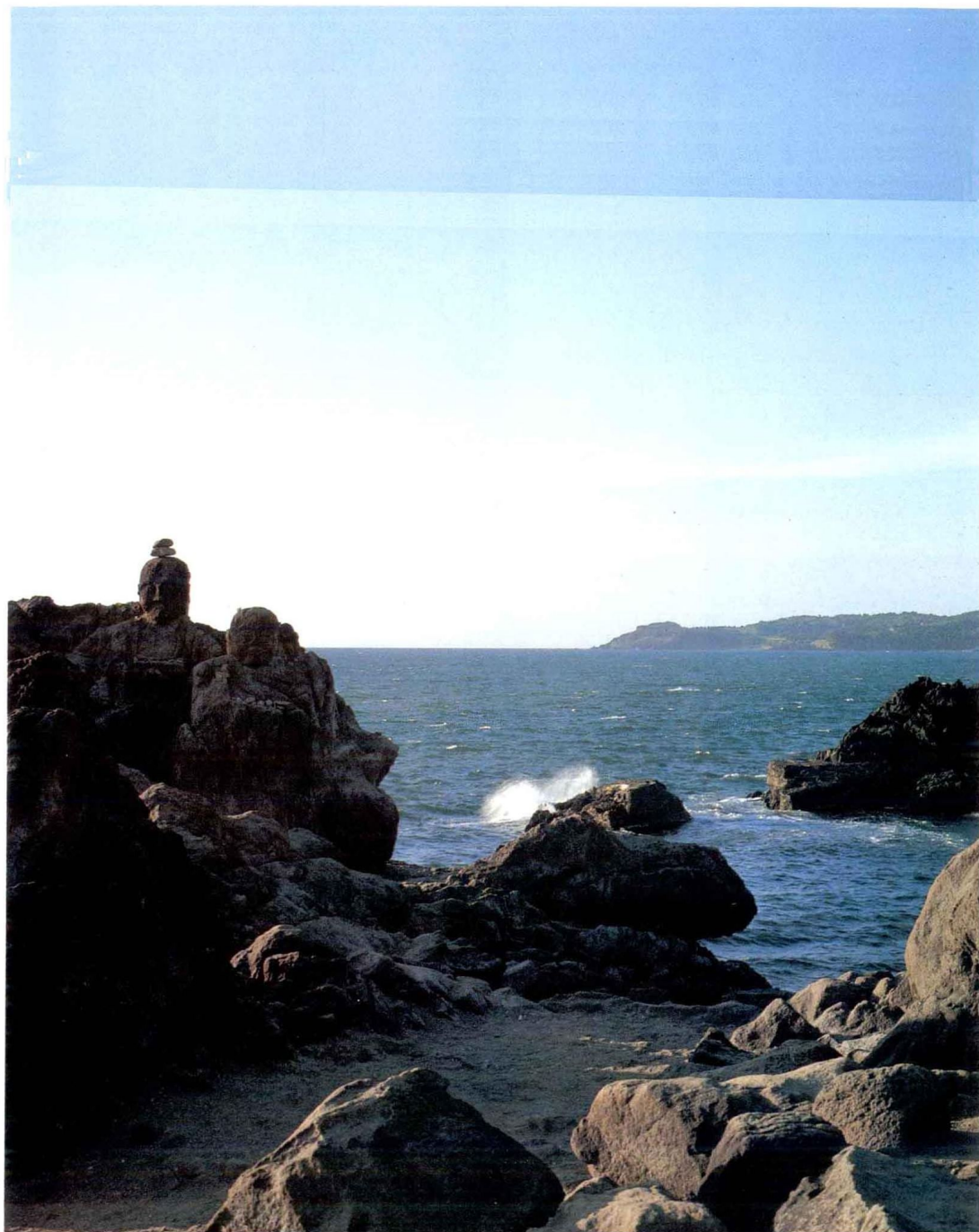
振替 東京八—二〇〇番

印刷所——図書印刷株式会社

用 紙——王子製紙株式会社

製 函——サンメイト倉持

本製本にはじゅうぶん注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がございましたら、おとりかえいたします。本書の内容の一部または全部を、無断で複写複製（コピー）することは法律で認められた場合を除き、著作権者および出版者の権利の侵害となりますので、その場合はあらかじめ小社まで許諾を求めてください。



1 日本海と三崎山 山形県の庄内平野は、平安初期に石鏡が降った所として正史に記録されているが、鳥海山の山麓から海に突出した三崎山からは、大陸からもたらされた本州島最古の青銅器が出土している。素戔鳴尊を祭る三崎神社や写真手前の十六羅漢の近くにも、高麗橋の地名など大陸文化のかくされた門戸の存在がしのばれる。この十六羅漢は吹浦に漂着した水死者の供養のため元治元年(1864)から3年の歳月をかけて刻まれたものだという。

撮影 品田佳彦

2~5 焼畑をつくる 山地斜面の森林を焼いてつくる焼畑は、古い農耕の伝統をよく伝えるものである。それはインドや東南アジア、中国西南部の山地などで、いまでも盛んに営まれ、焼畑に生業の基礎をおく特有の生活文化が生み出されている。わが国でも、かつて焼畑がひろく営まれていた。とくに稲作以前の時期には西日本を中心に、焼畑の文化がみられたが、稲作文化の展開とともに、その大部分が消滅した。焼畑を営むには、火入れにさき立って、まず、山ノ神に敬虔な祈りを捧げねばならない。それから点火、斜面の上部から焼き下ろし、やがて炎と煙が山腹をおおう。翌日焼け跡を整理し、ヒエやアワ、ソバなどの作物を播きつける。（昭和16年<1971>1月、高知県吉川郡池田町椿山にて）



2

5 3

4

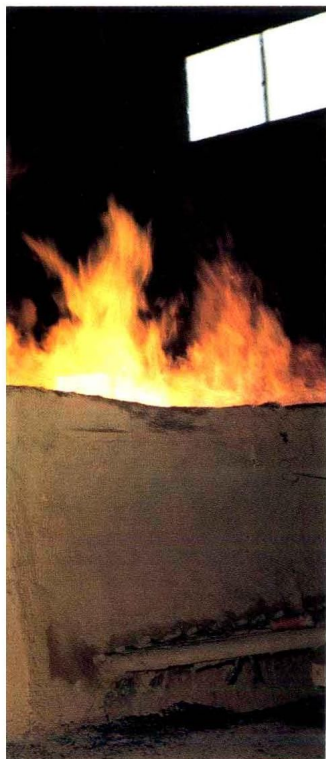






6 美保神社の製鉄絵馬 諸手船神事で名高い島根県八東郡美保関町(みほくわん)の美保神社は、漁民の厚い信仰を集めている。ここに江戸時代の製鉄の状況を描いた絵馬がある。天保8年(1837)に竹崎のたたら師であった卜蔵氏(うらざう)が寄進したもので、古代から製鉄の中心であった船通山(ふねつうさん)を背景に、中央に斐伊川(ひいがわ)、右手に野たたらを築いて神官姿の人たちが製鉄に従事している。炉の構造は、菅谷たたら(7)と類似する。 美保神社

8



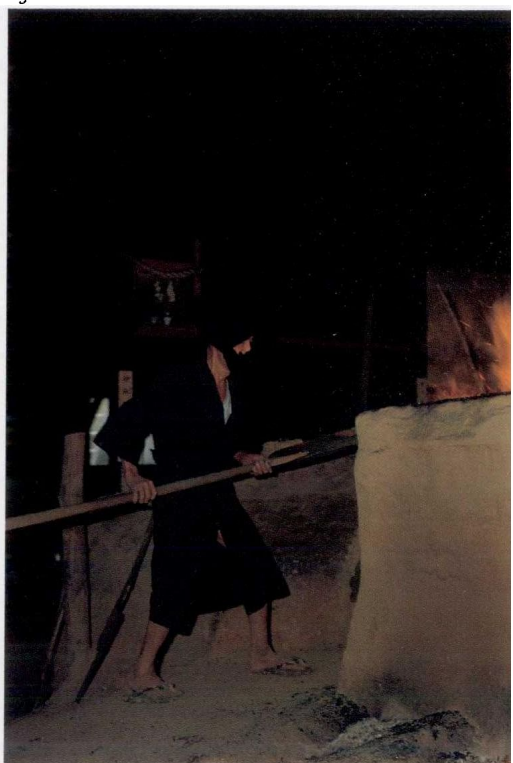


7 菅谷たたら内部 江戸時代から大正年間まで操業していた田部家の製鉄所で、内部に溶鉱炉と砂や鉄や木炭の置場などのある高殿を中心に、事務所の性格をもった元小屋や職人の扶持米、手当米を収納する土蔵、職人の住む長屋などがのこり、近世の製鉄集落のおもかげをよく伝えている。さらに西方には金屋子祠、背後の丘には山内祠があって、製鉄集団の信仰の状況もわかる。島根県飯石郡吉田村字菅谷。 撮影 青山富士夫

8～10 たたら製鉄 砂鉄を原料とし木炭を燃料とする製鉄は、たたら製鉄とよばれ、とくに日本刀の材料の和鋼（玉鋼）の生産にはこの伝統的な製錬法の復活がのぞまれた。そこで島上木炭銑工場（島根県横田町）の一画に日本美術刀剣保存協会が通称“日刀保たたら”を復活し、昭和52年(1977)に操業を始めた。たたら技術を伝える安部由蔵氏と久村敦治氏が村下（製鉄技師長）として参加した。

撮影 青山富士夫

10 9





11 『月次風俗図屏風』に描かれた室町時代の田植風景 田ごしらえをする鋤おこし、鎌ならし、耘すりが見え、大杵で苗を運ぶ男の姿もある。多数の早乙女の服装は一樣に笠をかぶっているが、着物の色と柄は赤、茶などに分かれている。早乙女の前方には苗を渡す男と、鎌と団扇を手にして音頭をとっている男が立っている。陸では白と黒の翁面らしきものをつけた男が扇子を手に踊り、太鼓、小鼓、笛ではやす男たちが見える。その前に田の神を祭ったものと思える三方に盃、金色の杓、酒桶、むすびか餅を盛った台が描かれている。田主の指揮の下に美しく着かぎった早乙女が鳴り物入りで田植をする風景は、田植が単なる稲作労働ではなく、信仰の儀礼でもあった初期の様子を伝えている。東京国立博物館



12 隼人舞 京都府綴喜郡田辺町大住の月読神社で昭和44年(1969)に再現された隼人舞。隼人舞は『記紀』の海幸山幸の神話をもとにしたもので、隼人の先祖のホスセリ(海幸彦)がヒコホホデミ(山幸彦)に服従する過程を示したものである。隼人舞は大嘗祭でおこなわれ薩摩本国でも隼人の一族によって伝えられてきているが、一方、大隅隼人によって山城国の大住地方に伝えられ、能楽の源流となった。舞に使用する櫛は平城宮址から出土した隼人の櫛を復元したものである。 撮影 松村 茂



13 豪族の墓室に描かれた壁画 壁画で墓室（横穴式石室）を飾った古墳は装飾古墳ともよばれるように、がいて幾何学文様が多い。その中で福岡県鞍手郡若宮町竹原古墳の石室奥壁の絵画は、中国の物語を描いたと推定される。一対のさしばを立て馬をひく人物が波頭のうえにあり、赤い鉤爪の怪獣がおそいかかっている情景から、古代中国の水中の竜馬から天馬を得ようとする信仰の影響を見ることができる。 撮影 井上博道

日本民俗文化大系 第三卷 稲と鉄 目次

序章

稲と鉄の渡来をめぐる

森 浩一

——民俗文化の伝統を再評価する——

一 鉄が出現するまで——日本列島の石器文化の様相——……………7

二 稲作・鉄器・王権そして古墳——日本列島的特色——……………24

三 “倭国の大乱”から“六世紀”へ——大陸文化の受容と

民衆生活への浸透——……………40

第一章

稲作以前の生業と生活

佐々木高明

一 稲作以前を考える……………59

二 稲作以前の生業の諸形態……………71

三 成熟せる採集社会と原初的農耕——縄文文化の東・西——……………95

四 初期的農耕社会の成立と展開……………110

第二章

稲作農耕の社会と民俗

瀬川芳則

一 ムラの姿……………133

二 米づくり……………147

三 格差のある社会——墓にみる弥生時代——……………159

第三章

金属文化の受容と展開

四 稲作農耕の技術	170
五 イネと民俗——マツリと信仰——	203
一 銅と金	221
二 鉄の民俗	244
三 鉄の技術	268
四 沖縄の鉄	282
五 エゾ地の鉄	301
六 水銀——民俗と製造技術	322

第四章

争いと戦い

大林 太良

一 縄文時代の戦争	337
二 衝撃武器の登場と征服戦	343
三 欺し討ちと人狩り、そして海上での戦い	353
四 刀剣の戦士と伝家の宝刀	361
五 女軍と千人針	370
六 神々と戦争	376

第五章

王権の発生と構造

谷川 健一

第六章

王権と祭儀

上田正昭

一 生き神としての王	385
二 君と王	391
三 司祭としての王	398
四 タカミムスビとミケツカミ	405
五 もがりと殯 ひな	413
六 穂祭と抜穂行事	419
七 神座の意味	423
八 諸説の検討	429

一 王者の性格	445
二 王者と信仰	456
三 祭儀の段階	469
四 王権祭儀の内実	487

口絵

1 日本海と三崎山	2	5 焼畑をつくる
6 美保神社の製鉄絵馬	7	菅谷たたら内部
11 『月次風俗図屏風』に描かれた室町時代の田植風景	8	10 たたら製鉄
12 隼人舞 はやとまい	13	豪族の墓室に描かれた壁画

写真監修

芳賀日出男

萩原秀三郎

装丁・本文
レイアウト

舟橋菊男

序章

稲と鉄の渡来をめぐる

——民俗文化の伝統を再評価する——

森 浩一



1 ^{ちようかいさん}鳥海山と庄内平野 鶴岡市から酒田市にかけての海岸砂丘は、9世紀に西浜の名でわが国の正史に記録されている。砂丘から北を眺めると、古代から神の山としておそれられてきた鳥海山の雄大な山塊がそびえている。その西麓が日本海に没しようとするあたりが三崎山で、北方から大陸文化が流入する要地でもあった。縄文時代に青銅製の刀もここに入ってきたのである。庄内平野には、^{でわこくふ}出羽国府と推定される^{きのわのま}城輪柵があり、^{りつりよう}律令政府の重要な拠点でもあった。

撮影 品田佳彦